

19 グレイト・オーモンド・ストリート 小児病院の設立について

柳澤波香

グレイト・オーモンド・ストリート小児病院 (Great Ormond Street Hospital for Sick Children) は、一八五二年、内科医チャールズ・ウエスト (Charles West) により、ロンドンの病める子供達を対象として設立されたイングランド初の小児病院である。イングランドでは一九世紀に入ると専門特化型ヴォランタリ・ホスピタルが数多く設立されたが、小児病院の設立は、その中においても、またヨーロッパ諸国における小児病院設立の年と比較しても決して早いものではなかった。

一九世紀に至るまで子供の hospitalisation とは founding hospital (捨子養育院) に収容されることを意味した。そこは、病気になるれば看病は受けるが適切な医療が施される場ではなかった。また子どもの一般病院への

入院は、母親との隔離に繋がり、情操上よくないという意見が根強く、子供の入院は極めて少なかった。ロンドンの St. Bartholomew's 病院では母親が病院で亡くなったときのみ、その子が七歳に達するまで病院に「収容」した。子供の病気の手当は年長婦人などの知恵に頼る傾向があり、手遅れとなるケースも多かった。そこで、ヨーロッパ大陸では一九世紀に入ると、パリ(二八〇二年)、ウィーン(一八三七年)、ブダペスト(二八三九年)、ベルリン及びトリノ(二八四三年)、コペンハーゲン(一八四五年)などで小児病院が相次いで設立された。ロンドンでは、一八世紀後半にアームストロング医師が『子供のための診療所』を設立、またチャールズ・ウエスト医師自らも『子供と婦人のための診療所』を当時開設してはいたが、これらは入院設備を有してはいなかった。イングランド各地で小児病院が建設され始めるのは一九世紀後半以降であり、イングランドの小児病院はヨーロッパの中では後発であった。これは当時のイングランド社会が産業資本主義の絶頂にあったことと関係が深い。児童は安い労働力として劣悪な環境で長時間酷使されていた。一八四

四年の工場法の制定により児童労働者の雇用に一定の制限が設けられたが、子どもを取り巻く医学的環境に関しては一九世紀後半に至るまで殆ど配慮されることもなく、殊に下層階級の子供の窮状は苛酷を極めた。

このような状況の中、ウエスト医師らがヨーロッパ大陸の小児病院を視察、イングランドにも小児病院を設立する必要性を認識し、一八五二年、医師と医師以外の篤志家の支援を得てロンドンのGreat Ormond Street 四九番地に、ベッド数一〇床の小児病院 (Great Ormond Street Hospital for Sick Children, 以下GOSHと称す) を設立した。貧しい子供の厳しい現実を描いた文豪ディケンズはGOSHの有力支援者で、彼の呼びかけにより病院には多くの寄付金が寄せられた。

設立から二〇数年間は病床数及び看護上の事由から入院は二歳以上一二歳以下の慢性及び急性疾患の患児に限定され、二歳未満の患児は外来診療のみとされた。子供には外科的処置ではなく内科的処置を施すべき、という医師の考えから手術は当初行なわれなかった。面会は感染を危惧し、制限、或いは完全に禁止されていた。GOSH

では子供の疾病に関する治療の他、設立時より診療方針の一環として母親への助言を行なった。

一八七〇年代に入ると、病床数が一二〇床へと増加し、二歳未満の患児も入院可能となった。また消毒及び麻酔の技術の向上により小児に対しても手術が行なわれるようになり一八九〇年には operating theatre が完成した。GOSHは設立時より医学生に小児疾患の知識を習得させる機関としての役割もあり、教育病院としてのこの小児病院には症例も多く集まり小児科学の確立に貢献した。

イングランドでは一八六〇年代から八〇年代にかけて小児病院が各地で設立され、子どもを取り巻く環境は社会的、医学的に変容していった。

(東京都新宿区)